今回のテーマは「日記」

ことわざに，喉元過ぎれば熱さを忘れると言いますが，人の記憶というものは存外に不確かかつ移ろいやすいものであります。とりわけ，大きな事件というわけでもない日常の出来事や日々の想いなどはすぐに忘れ去られて行くもので，それゆえに「日記」という記録は後世の人々に得難い情報を与えてくれるものであります。また時としてその記録は，筆者も意図せぬ形で我々の知を後押しいたします。鎌倉時代の歌人，藤原定家の日記，『明月記』に記された「赤気」（オーロラ）の記述は現代に至って，天文学上の研究成果に寄与することになりました。これは定家も思いもかけなかったことでありましょう。ことほどさように，日記というものは興味深いものであります。

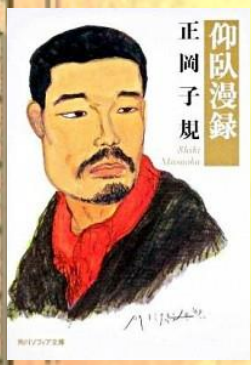
武漢日記－封鎖下６０日の魂の記録

方方／著，飯塚　容，渡辺　新一／訳　　河出書房新社

本書は中国の武漢市在住の作家が，新型コロナウイルス感染症に起因する都市封鎖が始まった２日後から，封鎖解除の日時が発表された日までの６０日にわたって欠かすことなく毎日作家自身のブログに書き綴った日記です。国情もあってか，何度も削除されたり様々な制限を受けたりしながらも，著者は書き続けます。曰く，「個人の記録は微々たるもので全体を概括できないが，無数の個人の記録を集めれば，あらゆる角度からあらゆる過程の真相を明らかにすることができるだろう。」

居住する団地で実施される生活物資の団体購入のシステムが徐々に整って行く様子や，ボランティアの若者の働きについてなど，市井の生活者としての記録も交えながら綴られる日記に，状況が改善されていくにしたがって射していく光明は，当時の不安な自分自身の心も落ち着かせてくれました。

ここに書かれていることは程度の差こそあれ，私がこの本を読み，これを書いている２０２１年５月の日本で，現在進行形で起こっていることと非常に似通っています。果たして私たちは，１年以上前に外国で起こっていた事象を他山の石とすることができているでしょうか。自問は私の中で今も続いています。



仰臥漫録

正岡　子規／著　　角川学芸出版

本書は俳人・正岡子規が死の前年（明治３４年）から翌年の死の直前まで，病床で綴った日記であり，作中には，日々創作された句や絵が多数記され，自身の病状や訪問者の記録などとともに，日々の食事や間食が事細かに記録されています。その量たるや結核という当時の死の病を患っている人が１日に食べる量だとは思えません。最初はそこに驚くばかりでしたが，読み進めるにしたがって何やら恐れのような感情が湧いてくるのです。読後に思い至った，その感情を引き起こした原因は，鬼気迫る，凄まじいまでの生への執着でした。食べることは生きること，とはよく言われる言葉でありますが，健康な人間が思うのとは全く違う次元で，子規にとって食は生そのものであり，食に向かう姿勢は，生きることを望む姿勢そのものだったのでしょう。それはまた，精神の強さだったのかもしれません。

手短にかつ平易な言葉で綴られた日記が与えたインパクトはあまりに強く，初めて読んだのは遠い過去でありながらもこの作品は私の中で今も変わらぬ異彩を放っています。